

# 記録を基礎とした『舌切雀』説話の研究

—銅鑄小本『舌切雀』から、原稿本『新曲舌喜里寿々女』まで—

小池 藤五郎

## は し が き

窮措大の筆者には、広い分野にわたり、研究完成一步手前の項目が多い。幸にも人文科学研究所の補助を得たので、その中の一項目をまとめた。誠に感謝に堪えない。原稿は期日に完成していたが、不測の事態を恐れ、筐底に秘めて置いた。

## 目 次

1	銅鑄(版)本の研究……………	34
2	言文一致銅鑄小本『舌切雀』と 「京の藁兵衛」……………	36
3	『舌切り雀』潤色の『歌等功雀高名』……………	36
4	翻訳の『舌切雀』……………	38
5	研究の正しい方法と悲哀……………	39
6	「雀恩に報ゆる事」の梗概……………	40
7	説話の成長。研究資料の蒐集……………	41
8	『元禄刊本 したきれ雀』……………	42
9	『燕石雑誌』の舌切雀……………	42
10	『舌切雀』説話の二系統……………	42
11	『寛延刊本 したきれ雀』……………	43
12	第二系統説話の責罰緩和……………	43
13	賀茂規清と『舌切雀』……………	44
14	『宝暦刊本 舌切すずめ』……………	44
15	国学者は『舌切雀』を長歌に詠じた……………	45
16	『竹の栖物語』が最優秀作品……………	45
17	原稿本『新曲舌喜里寿々女』……………	47
18	結 論……………	48

## 1. 銅鑄(版)本の研究

「銅鑄本」とは「銅版本」の意味、明治20年前後に、浅草区森田町奥田忠兵衛出版『絵本太閤記』に「銅鑄小本品々」、その他の諸書にも見える名称である。

明治20年代中頃の文学から、30年代の文学へ接続する時点を注視すると、形態・内容・表記法・活字・印刷法で、銅鑄本との関係は大きい。これは、明時30年代の文学の母胎にもつながる一体の作品とみられる。しかし学界からは、全く注意されていない。勿論、一作品として文芸的の価値のある物は少ないが、銅鑄本全体とし、明治の新文学・新児童文学を産み出す基礎となっている。

銅鑄本は各地の図書館に所蔵され、蔵書家の書架にも多少ずつはある。こうした関係で、調査には時間が多くかかり、多数の銅鑄本を見た上での、統計的研究も必要である。従って数部の資料による概括的の論述は、時に正確を失する恐れがある。

『日本文学史』(久松潜一郎編、至文堂出版)は、現在改訂中で、その「近世編」のなか、筆者の担当の「第6章。江戸草紙(草雙紙)」には、末尾に「明治合巻」を新に付記し、その中に「銅鑄本」のことを述べておいた。

『明治英名百首』(藤田徳果編輯、明治15年4月、文盛堂出版。縦12~横8.4種)は銅鑄小本で口絵は色摺りで、

「西南の役平治して禁中庶將に凱陣の天盃を賜わる図」  
「新年御歌はじめの図」。

をかかげる。ついで明治天皇・皇后宮・大勲位二品有栖川熾仁親王・太政大臣三条藤原実美朝臣の順で、岩倉具視・和宮・徳川慶喜に及ぶ。最後が「従五位大鳥圭介公」で、合計百名の肖像を、上下二段形式の下段に掲げ、その脇に詩文をおく。第35番の「毛内滝子」には、

滝子はもと陸奥国津軽弘前の藩士棟方氏の女なり。幼きより文学を好み、和漢の書に螢雪の功を積み、また武を修む。年19にして、同藩の参政毛内有右衛門に嫁す。然るに藩士二派に分れ、奸党の為に、夫有右衛門禁錮せらる。滝子先妻の子三人を育て、舅に仕へ怠らず、その貞操遠近の亀鑑となれり。

ふり積る 雪にひびきも 埋れけん  
音かすかなる 暁の鐘

絵には、前に硯をおき、扇面に揮毫しようとする35・6歳の美女の姿が画かれてある。

第74番は福沢諭吉である。机に向い脇をつく。花瓶には梅花がさされてある。

君は豊前中津の人にして、天質非凡なり。弱冠郷里を出て、大坂に遊び、緒方洪庵の門に入て蘭書を学び、万延元年米国に赴き、後幕府の使節に随って欧州を巡回し、帰朝して西洋事情を著はし、慶応義塾を開き、尚数十部の翻訳書を著述して、世に裨益なる事、あげて算へがたし。

青均含露<sub>払</sub> 蒼空 暁霧晴時間<sub>早</sub> 鴻<sub>一</sub>  
柳葉飄々<sub>黄</sub> 葉下 水村山郭<sub>關</sub> 秋風<sub>一</sub>

銅鑄中本(縦12.2、横11.5)も同様世に行われた。銅鑄印刷による中本・小本にこそ、文明開化の便利さを感じたらしい。

そのため、小形で印刷の鮮明な小本が、携帯に便利で成人用に盛に出版され、他面、小さい本で可愛い事は、児童向きという江戸草紙伝統の行き方にピタリで、この点が児童向の小本として、その発展を後にのこす。

前記の有名人の羅列こそは、後年の興信録の形態につながる。銅鑄中本には、袋入(緑・黄などの地色表紙で、模様は僅で、あったり無かったりである)と切付表紙(表紙は、黒・赤・黄・緑・紫・藍・ピンク・鼠)とが、色などの色彩を用いた多色刷り、錦絵表紙。とがある。明治22年尾関トヨ(日本橋区若松町、深川屋、豊栄堂)の店からは、

○銅版中本袋入部——『絵本曾我物語』。『甲越川中島合戦』。『明治太平記』。『加賀騒動』。『絵本千代萩』。『岩見重太郎』。『絵本太閤記』。『鍋島猫騒動』。『笹野権三郎』。『日蓮上人一代記』。『絵本忠臣蔵』。『絵本楠公記』。『清正勲功記』。『絵本三国九尾伝』。『源平盛衰記』。『高田馬場仇討』。『大江山酒呑童子』。『絵本西遊記俊錦』。『紀文大盡名誉鑑』。『新門辰五郎慶応水滸伝』小金井小次郎。『絵本塩原多助』。『東京名勝独案内』。『高橋有馬騒動』。『陸海軍大演習』。『児雷也豪傑物語』。『日本外史内 絵本将門記』。

○銅版中本切付部——は右に列記した書のうちで「東京名勝独案内」だけを除き、他はすべて表紙のみ、切付として出版し、袋入・切付の二通りの形態で出版した。

○往来物——消息往来。商売往来。大日本国尽。名頭字尽。苗名尽。

右の以外に、かるた双六類。銅版額絵・銅版東京名所額類。

こうした物が豊栄堂から銅版として出版されている様は偉観である。他の諸書林も同様で、明治10年末から20年にかけて、銅版出版の書冊の多さが思われる。

『頓智童子の宝』(茶窩主人こと大館利一編。)は大阪での出版。明治21年文欽堂出版

背皮まがい、厚紙西洋風表紙で、西洋の出版物をそのまま真似た、最新式の出版物である。41項の目次が最初につき、「英和日用会話」には、私は電話局へさんじ アイアム ゴーイング ツー ゼー テレグラフ オフフィス マア此本屋へよ レット アス フォルスト ビズイット to the telegraph office. つてみまじやう Let us first visit this book-store? の類が記され「改良商売往来」には、

夫文化開進之今日、於諸商家、夏々物々所使用之文字、往復之書翰、端書、受取、日記、注文、物貨之員数、出入計算、諸帳簿証券之類者、定規之印紙、必無遺脱、可致貼用……

の如く、従来の漢文の保存された所もあるが、「窮理のはなし」には、次の如く開明の天理をしるす。

日は静にして光に増減なし。地球みづからめぐりて、昼夜をわかづ。地球は円くしててまり毯のごとく、その周囲凡そ一万二百卅里余あり……日は一処に止りてうんき温気の本元となり、地球これをめぐりて、四季の変をなす。

文明開化の点で、特に注意される事は、従来の銅鑄本が、柱題の下に丁数記入(袋綴の丁数が印刷される)が日本式であった

のに、これには、柱題はなく、柱の上で欄外に、日本数字で右から左へ横に「五百」(105の表示)の如く頁数を記す。「六百」(106)は次の頁の上、右隅に記してある。これこそ、日本の書冊形態史上未曾有のことであったと筆者は認める。その他の注意すべき諸点は、

- (1)従来の銅鑄小本と同様で、袋綴しんがみ芯紙一枚入りである事。
- (2)従来の柱題を完全にすて去った事。
- (3)内容は百科事典式である事。
- (4)表紙は赤色の厚紙で、西洋風の模様入のラインで囲む。背は黒皮めかし、題簽文字は右から左への横書きで、完全に洋書スタイル、製本は糸綴らしい。
- (5)口絵には、大瓶に落ちこんだ子供を救うため、瓶に大石を投げつけて割った、支那の司馬温公の故事を画き、頁は「ロ一」(日絵、第1頁の意味)とし、その裏は、目次で「ロ二」と頁をしるす。
- (6)全108頁で、明治21年5月、大阪上本町文欽堂出版である。

明治の文芸書が、洋風の形態を取入れた順路は、精細に検討すると複雑である。とにかく、かの『小説神髓』・『当世書生気質』は明治合巻を真似て、清朝活字を取入れかあるこちはなださくんき『薫東風英軍記』(河竹黙阿弥翁枝正、戸田鉄研著。小林清親画。四幕物。)『名鎗笹野実記』(広岡幸助編、芳幾画。)等は半紙本で明朝活字を採用、『今古大岡仁政録』(白子屋お熊。広岡幸助著。一松)及び同体裁の『鈴川源十郎之記』、『薺 荒柳美談』、『護国女太平記』、『参考 天帥軍記』なども同様で、『薫東風英軍記』をのぞいては、内容は明治合巻調で新味は少ない。

ところが銅鑄本の形態と、新に抬頭する言文一致の文体とが、からみ合って、その後を引継いだ。『小説神髓』の文学論、『当世書生気質』の写実的内容の影響は、更に『言文一致』(物集高見著。明)の主張に符節を合わせ、『我楽多文庫』に連載の『嘲笑小説天狗』(山田美妙作)の生硬な新文体を産み出した。それは本間久雄博士の指摘されるしらべのひとよし『明治文学』『風琴調一節』(山田美妙作。『以良都女』副刊)から、未発表の小説『賈金剛石』の序文などを本流とする山田美妙苦心のあとである。

ところが、出版物の形態上からは、一世の書冊をリードするかの様であった銅鑄本、なかんずく明治合巻の未勢は、文体においては不可解な保守の文体を固執した。その結果は、文章の盛り上げる内容についても清新の魅力を欠き、出版物の主流からはずれ、庶民大衆の手から離れて幼童の手に移った。明治19年ごろには、すでにこの兆候が現れ、『新撰 なぞなぞ合』、『西洋手品絵本』、『東海道滑稽膝栗毛』(いずれも竹田栄久編輯。浅草)などはそれである。内容は卑俗化・童蒙化してしまった。こうした中から、意外にも言文一致による銅鑄本が、外観内容共に、新時代の児童文学の見本として現れた。

## 2. 言文一致銅鑄小本『舌切雀』と「京の藁兵衛」

言文一致の文体で書かれてい、しかも銅鑄小本の舌切雀の発見は、砂中からダイヤモンドを拾い取った如くに感じ、私は雀躍した。

昔昔のことなるが、爺と婆とが住んだ。爺は慈悲深くして、子雀を飼ひ、あはれみ育てた。爺の留守なりし時、婆は洗濯の糊をつくった。その糊を冷しおきたるに、子雀寄り来って、なめつくした。婆大きに怒りて、はさみもて、舌を切りすて、戸外にはなちやった。

これが言文一致銅鑄小本『舌切雀』の始めの部分である。浅草区蔵前森田町奥田忠兵衛版、明治22年の出版であり、その文体はまだ生硬で、熟さないところがある。或は『桃太郎』なども同時出版かと思われるが、資料はこれ以外に目にふれず、調査至難で今日では、手がとどかない。ただしこれより12年後の明治34年5月出版の『日本五大噺』(京の藁兵衛述。後藤芳景画。小波序。水蔭跋。)では、舌切雀——むかし、ある処に、よき爺と、あしき婆があった。爺は常に一羽の雀を愛して居たを、婆はこれを邪魔がった。

の如き文体である。言文一致体として銅鑄本の方は発達上の様であるが、とにかく明治22年に、従来の銅鑄本の保守的文体に大亀裂を生じた事は、注目すべき事実である。

小波は「改作の行文佳」とほめ、水蔭は「京の藁兵衛氏は平易なる言葉を用ゐて」とその言文一致を賛美する。

原作品である「童話赤本事始」(馬琴作。国貞画。文)は曲亭馬琴が、独得の意匠のもとに、「桃太郎」その他の五種の童話を選び、一編の小説に作りあげた妙作である。その取合せの妙は、原作を読むと充分に知れ、誰も思はず膝をうつものである。元来馬琴自身は、その該博な知識と、強靱な記憶力により、童話研究と説話の記載を行っている。

有名な彼の随筆『燕石雑志』(文化7年北山考逸序。文化6年馬琴)には、「猿蟹合戦」、「桃太郎」、「舌切雀」、「花咲爺」、「兎大手柄」、「彌猴生胆」、「浦島の子」の説話が取上げてある。

これは、今から166年前の文化以前、彼の幼時あたり、江戸を中心に行われていた口碑童話を大体にそのまま記録したものらしく、学者であり考証家である馬琴の事として、記載には、彼の、漢学的配慮考証が加えてある。

今日の童話研究者や民間伝承研究者の或者は、現在行われている説話を無上の物としてそれを記録し、それぞれの話の歴史的变化を考えず、100年前も150年前も、その話が変化する事なく、そのまま行われたものと誤信し、年代の古さや発生なども、それだけの貧弱な材料で、大げさに論ずる。この非学的の行き方と、馬琴の方

法とは格段の差である。特に記録したのが「文化6年の時点」でも、なお彼は「今の子どもは、少し作りかへたるところあり」とも記す。時代と説話形態のつながりに於て、学的に精細峻厳である。今日、山村の老婆あたりから聞いた話を無上のものとし、『燕石雑志』の存在さえも知らぬ採集学者とは同日の談ではない。

『燕石雑志』著述の15年後に『赤本事始』が刊行される。思うに馬琴は、『燕石雑志』における五大童話の調査を基礎とし、『赤本事始』を創作したらしく、ここに素材・検討・趣向・創作の馬琴の厳しい経過が思われる。

明治30年代に少年世界は青少年の人気の中心であった。少年世界主筆の江見水蔭は、

京の藁兵衛子、何処よりか『赤本事始』を得来りて、之を出版せんと計りたるが、文政と明治とは時代を異にし、当時と今日とは読者を異にするを以て、茲に改作の必要を生じ、子が苦心を見るに至れるなり。

と記す。『舌切り雀』(銅鑄)は明治22年、『日本五大噺』は明治34年出版である。新時代は、言文一致を次第に角立たぬように、口に耳に心に慣れさせた。

離れの、小屋に、来て見れば。

『よよ。』と、泣く、女の声。

『雀姫様か。』と、卯三吉は、扉を、蹴破って、をどり込みました。

中では、枉田が、無惨にも、

「エ、よく、吼る女だわへ、其、舌の根を。」(原文は「分別書き方」である故、引用文は、1)マヌ置き部分を読点とした

が、明治34年の『日本五大噺』(京の藁兵衛)の言文一致体である。明治22年の銅鑄本『舌切り雀』と比較する時、後年の言文一致体に、平易さと口語を必須要件とする童話が、銅鑄小本『舌切雀』なる作品をもって、さきがけた事実がわかる。物集高見著の『言文一致』、山田美妙の『嘲戒小説天狗』のみが、言文一致採用の大功を独占すべきでは無い事を、吾人は主張する。

## 3. 『舌切雀』潤色の『歌等功雀高名』

江戸時代の人には、「洒落」であり、「通」である。理屈っぽい言葉、そうした行動を野暮とし、常にニンマリ笑って過すことを理想とした。「茶の笑」は、フンといた程度、あるいは、僅に頬のゆらぐ程度の笑いで、それを上乘の笑いと、哄笑や皮肉や揶揄を下品とした。黄表紙の上乗の作には「茶の笑」たたえてある。

『歌等功雀高名』(宝倉主作。歌川豊国画。黄表紙。寛政8年刊)の序文には、「吉原雀家系」が添えてある。吉原雀とは「割葦鳥」をいうが、実は江戸吉原に集る「うかれ客」をも指して言う。

吉原を仙境とし、歌舞伎や歌謡を唯一の慰安とし、また誇りとした江戸っ子の心には、『舌切雀』は「吉原雀」の形で、早くから融けこんでいた。江戸長唄の『教草吉

原雀』(明和5年11月市村座興行「男山弓勢競」)はその代表で、吉原雀をば、もちろん、吉原を流す素見ぞめきの客とし、恋心の深まりおどる廓情調を、

……さうした黄菊と白菊の、同じ勤のその中に、外の客衆は捨小舟、流もあへぬ紅葉もみじばの、目立つ芙蓉しんぶんの分け隔て、ただ撫子と神かけて、何時か廓を離れて紫苑、さうした心の鬼百合と……

の詞章で表現する。これはもと、奥州攻の世界の顔見せ狂言の一場面の仕組みであった。これから清元節の『筐かた花手向橋』(文政7年2月18日市村座興行「茶の湯景清」大切り所作。外題名は4代目市村竹之丞百年忌追善の意)が作られてい、

勤めする身も素人も、女子に二つはないわいな。よしてくれくれ、よしてくれよ、吉原雀の雛から飼はれて……笑に花ならば桜時、月ならば最中竹むらに、その青桜の名にし負ふ、新吉原といふ雀、今に噂や残ららん。

に、こまやかで麗しく、高く薫る廓気分を伝える。

さて『歌等功雀高名』の系図は、

黄雀 後漢楊宝が花陰山にてとらへし雀也——福羅雀 (楊宝子孫、宝の字をかたどって、福ら雀ト云。日本へわたる。)——舌切雀ごせんじの雀なり——海中蛤見ごんごみ五雜俎——竹ニ雀 田倉娘のすもやう政太夫が来てものあり——脚雀あしづな 焼やたいみせ、又、 雀形 出来合のびや——放雀 浅草観音の地内——手妻 芥子介が楽うぶにあり 十代目 吉原雀。

の如き洒落た系図。これは子供向の物ではなく、童話に取材するが『童話 赤本事始』(馬琴作。国貞西。文政7年刊、合巻)と同様、成人を讀者に予定した小説である。以下は梗概。

抑々吉原雀の根本を尋ねると、後漢の楊宝が花陰山で鳥に食はれようとする巢立ちの雀を助けて帰り、飼養していた。百日余で羽根が生えて飛び去った事が、そのはじめである。この雀の子孫が日本に渡った。延喜の帝の頃の福羅雀はその子孫である。福羅雀は吉田の片ほとりに住む爺婆に飼われ、可愛がられていたが、或時洗濯の糊をなめたので、ついに舌を切って追出された。雀は、

「糊をなめて舌を切られるとは、酒を買って尻を切られたよりましであろうか。いっそ舌がヒリヒリする。舌ヒリ雀じゃ」

の如く洒落る。舌を切られ、三度の食事も出来ず、親雀は心配して医者にかけ、「鳥のまち」の御符をいただくやら、「鳥越」の毘沙門様へ跣詣はだしまいりをするやら、大騒ぎである。この様な事件が起ったとは知らず、爺は山から帰ってき、婆の話聞いてびっくり仰天し、雀を捜しに出た。雀は我家へ爺を迎えて、非常にご馳走をした。舌を切られたので久しく外へ雀は出なかったが、今日はブラリと海辺へ出てみた。風が強くて、吹き飛ばされ、蛤が口を開いているその口の中へ落ちこんだ。蛤は雀をくわえたまま、沖の方へ動いて行っ

た。

久しぶりに遊に出た子雀が帰らないので、両親の雀は心配し、向う三軒両隣をたのみ、椎の木屋敷から、向島の方を捜してもらった。

蛤は、雀をくわえたまま竜宮へ行った。そこで子雀に、「何か芸があるか」と聞くと、竹に雀の軽業かろうりが出来るというので、竜宮の軽業師の蝶蝶てつてつにこの雀を売った。子雀は竜宮の広小路である两国という場所で、軽業をはじめた。今までに豚の軽業、蝙蝠の軽業などは聞いたが、雀の軽業は誰も見たことが無いので、大評判になった。

軽業をやめた子雀は商買をはじめた。「鮒ふな(脚)の雀焼」という物をこしらえて売出した。竜宮には、金鑄焼きんづばやき・雁金焼かりがねやきはあったが、「鮒の雀焼」ははじめてだとて、大評判になった。しかし焼くそばから、雀は自分で食ってしまうので、遂にこの商売には失敗した。失敗し貧乏雀になった福羅雀は、奉公しようとし、口入屋の手で表具屋へ住込んだ。そこで得意の「雀形」を張って、少し工面が良くなったが、挿鉢の糊を、みんな嘗めた事でしくじり、表具屋を逃げ出した。

蛤の口へ落込んだため、こんな身になったのだ。もし蛤の口へ再び飛こんだら、故郷へ帰れそうなものと思いい、幸にも口を開いている蛤があったので、飛込んだところ、何処かえ連れて行かれた。そのうちに蛤が口を開いたので、口から飛び出した。蛤はすでに汐干狩の人の手で拾われてい、福羅雀は、恋しい故郷、江戸洲崎の浜へ出た。喜んで飛んで行くと、友達の雀に出会い、まだ碌に話もしないうちに、鳥刺とりさしに刺され、安針町へ売られた。そこの店の鳥籠の中で、末は鷹の飼食にされるものと覚悟していると、宇佐八幡の御告により、諸国に放生会が始り、江戸浅草の観音地内で放された。

この時観世音菩薩が現れて、

「今日まで汝を守ったのは、我と揚宝の霊である。今からは、浅草の手品師芥子之介の手品の種にかわれよ」

とお告げになった。

芥子之介の手品の種となった雀は、世間で大評判である。手品の小屋は大入りで、芥子之介も雀も、大金を儲けた。雀は慰に義太夫節をならい、藪間となり、『吉原雀』という唄を作った。この唄は今も歌はれている。可愛い子には旅をさせろ——の諺どおりで、雀は今、本当に福羅雀となって暮した。

歌川豊国の挿絵(每丁)で、岩戸屋板、寛政8年(1796)出版である。この頃は山東京伝・曲亭馬琴・十遍舎一九・桜川慈悲成・式亭三馬などの活躍した時代で、こうした「茶の滑稽」をひどく江戸っ子は好み、成人も成人、

通人・粹士に愛読され、成人用に多く書かれた。その中には、ベスト・セラーとなり、1種で1万2・3千部の出版数に達した作品もあり、世界出版史上でも珍しかった。その本質はナンセンスである。江戸っ子の誇りの両国の広小路、洲崎などから、鳥のまち、芥子之助の手品、豚や蝙蝠の軽業、雀形、金鰐焼・雁金焼・鮎の雀焼などは、当時江戸っ子の人気が高かった事物である。「竹に雀」の田舎娘の裾模様、出来合の屏風の雀形の間の抜けた絵柄など、それぞれに取上げられている。

#### 4. 翻訳の『舌切雀』

馬琴は日本国特有の昔話として、前記の如き7説話を選んだ。明治27・8年の戦争を経て国民的意識が強まり、馬琴の7話中から、「獼猴生胆」・「浦島之子」を除いた残りを、5大童話とよび、更に国民童話ともよばれるに至った。

巖谷小波がベルリン東洋語学校で、日本語科の講座を担当していた時に、京の蘂兵衛が『日本5大噺』の数部を送った。小波はそれを科外の教科書とした。学生は非常に興味深く読んだとのことである。

明治36年頃に『日本5大噺』を、日本文学通のロイドが訳したとの事、これは広く日本の昔噺を外国に伝える目的であると小波は記す。この訳本が世界に広まるようになった時点で、小波はこうも記す。

もしそれ、原作者馬琴の阿爺、地下に此事を聞き付けて、

『何と乃公様は豪かろう』

などと例の鼻を蠶かすなら、余はその鼻頭に一拵を加へて、敢へて問はん、

「蘂兵衛さんにお礼を申したか」

と、 (『日本5大噺』小波の序文)

巖谷小波のこの序文は、京の蘂兵衛の取るに足らぬこの改作を、褒めすぎ、馬琴の作品をも創作態度をも、全く知らない。単なる洒落としても、見当違いであった。

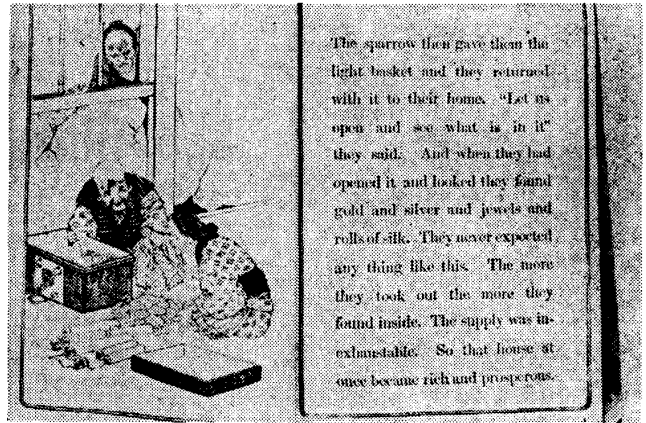
小波が、事々しく指摘するロイドの翻訳よりも19年前、明治18年8月17日に、ダビッド・タムソンが英訳、挿絵は鮮斎永濯が画き、弘文社(東京南佐野)から出版の、

「The Tongue Cut Sparrow (Japanese Fairy Tales)」があり、絵の出来は非常に良く、大体に中学2年程度の英文で書かれてある(小浪の記事は正確緻密でない)。

結末は、

Then when she took off the lid and looked in a whole troop of frightful devils came bouncing out from the inside and at once tore the old woman to pieces.

の如くである。林弘之訳の The Old Story of Sitakiri Suzume (明治40年再版) は、挿絵などは前者より劣り、終の方は、爺の忠告によって婆が、貧慾な心を変じ、良い人に



(“The Tongue Cut Sparrow” ダビッドタムソン訳述° 明治18年出版。山田比呂子撮影。)

なったとしてある。また明治35年頃に、東京通信学院が発行した「英文お伽噺」の第6編が「舌切雀」である。

明治18年から22年頃の翻訳書の中で、絵の素晴らしい物は、明治18年版の『Battle of The Monkey & The Carb』(ダビッド・タムソン訳)・『Kachi-Kachi Mountain』(前に同じ)・『The Woodcutter's Daughter』(日本昔噺。『竹取物語』明治22年5月出版。東京府平民長谷川武次郎。訳者、米国人ミロル。発行所弘文社。西工東京)である。ミロル訳の『竹取物語』には、Japanese Fairy Tale. Princess Splendor (原文のまま)と表題が記してある。筆者は英文に訳された日本の物語や童話本で、これほどの豪華本を見た事がない。

用紙はチリメン紙、表紙は5・6色摺。チリメン紙に竹葉・竹幹の中に立つ唐衣姿で赫奕たるかぐや姫の姿を、錦絵そのままに表現する。錦絵摺りの挿絵18図、それに小さなカットを入れ、見返しや扉など、薄い山藍摺の地、見返しの方に月、扉へかけ墨摺りで、葉つきの竹の枝を風雅に横たえ、各頁の枠は目さむる緑の、葉つき或は幹のみの竹で、裏表紙は地は鶯色に雪持笹の模様、全体が袋綴じ、背は柑子色の絹、大和綴で、綴糸は鶯色(これは誰人かが綴じたものかも知れない)で、至れり尽せりの装訂である。日本の古い物語と日本の美を知らせる目的が、はっきり表現されている。小林永濯の挿絵は、『Battle of The Monkey & The Carb』と同様に傑作である。特に、

さきさきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し待りつるなり。さのみやはとて、うち出で待りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず…… (『竹取物語』)

のあたりは、要点をとらえて、

“From the very beginning of spring, have I wished to tell you, but was afraid of distressing you too much, and now I must speak. I am really a child of the moon and in the bright Capital there have a father and mother. Compelled by a decree of fate, I came to this earth for a while, but now the time approaches when I must return, and at the full-moon of this month, some one will come to take me back.

Do not think that I wish to leave you and go to my former home!"

右の如く訳し、薄墨色の山の上に出た月に向い、脇息に両肘を置いてうつ向き悩む赫映姫のさま、背後に朱塗高足の香台の上の香爐を画き、まことに優雅で寂然たる様である。

明治22年のこの出版は、結果的には、偉大な日本宣伝だったらしいが、他面には、外国語を学ぶ青年達が、外国の話を書いた物によるよりも、馴れている物語・昔話ゆえ、楽に学べるといった教育的の意味もあった。童話・物語が、かかる目的に利用された事は、国民童話の価値の再認識とも考えられる。

## 5. 研究の正しい方法と悲哀

たのもしや てんつるてんの <sup>はつあわせ</sup> 初裕

俳諧寺一茶は、わが子の成長を、のこのよに吟じて喜んだ。また、

あっぱれの 大若竹ぞ 見ぬうちに

とも吟じた。初夏に、柔かな若葉を、親竹よりも高く、朝風にそよがす若い竹、その成長の早さ、すがすがしさを、讚美した句である。

成長は説話であっても、若竹同様である。もしこの「舌切雀」の説話が、口碑のみで伝わっていたら、恐らくは、その成長の跡をたどる事は不可能である。文献に記されてある「舌切雀」の説話を問題とせず、あるいはそうした物が無いとみる誤謬の状態で、この説話を調べたら、現在某地に伝わる話、某某或は某々の語っている話を記録し、それを比較するのみで、年代的に一步も進めない。進むとしたら、現在いろいろの形で伝わっている物を較べ、大体これこれが古いだろうといった、「だろう研究」より外にはない。現在の民間伝承説話の研究者には、こうした行き方が多いようだ。

江戸草紙（赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻）や随筆、その他の雑書中には、童話がそのまま、或は脚色・潤色されて記された物が多い。そうした文献では、その書の出版年が明確の場合が多いから、元禄何年には、かくかくの形で、『花咲爺』は語られていた。更に下って文化元年には、何処何処ではこれこれの形で語られていたと、それが記されてある文献の年代から、大体に推定出来る。そうして、元禄と文化の双方を比較し、語根の検討、話の変化成長を知りうる。

私は昭和のはじめから「記録を基礎とする国民童話の研究」を、京伝・馬琴・西鶴などの研究と並行して行って来た。この研究方法は、最も確実であるが、民話採集などと違い、何処に史料があるやらわからず、図書館・蔵書家の歴訪、原史料の購入より方法がなく、大きな努力と資力とを必要とし、その両者も今は尽きはててしま

った。しかし、一度史料によって、話の形と年代とを掴み得たら、それこそ動かぬ物で、民話採集などによるものとは同日の談ではない。

昭和12年11月4日、文部省主催の諸学振興会、第1回国語国文学会で「<sup>記録を基礎とする</sup>桃太郎説話の研究」を発表し、島津久基博士の民話採集様式の所説を、完全に破ったが、これに対して、33年後の今日まで、筆者の結論なり、基礎史料なりを破った学者は一人も見当らない。

こうした立場には立つが、さて史料となると、思うに任せない。古典商に新史料が、時には現れるが、5大童話の資料は特に高価で、入手出来ない場合が多く、資力に乏しい身には、購入者の手に渡る前に、出品者側に頼んで、調べさせて貰う外には手はない。また地方の書店では、目録を受取り、直ちに電話しても、すでに売約済みとなっている場合が多い。この様に、史料を基礎としての研究は、独創的で爽快、他の追随をゆるさぬものがあるが、大きな資力、努力を要し、史料購入費の工面が出来ず、しばしば深く悲哀を感じる。

活字本の甲を撫で、乙をさすり、丙の説と丁の論を取り合せ、左顧右眄、反駁を恐れつつ、御気嫌とりどりに書く論文に比し、ズバリと論断出来る。こうした論文には、どうにも歯が立たず、新発見があり、確実な資料を踏まえている事などで、全く後に続く論がなく、爽快至極である。若かりし日の私は、こうした独創的の立場を常に願い、恩師藤村作先生にも、しばしば申しあげた事があるが、それは青年客気の然らしめた処だった。

第2次大戦前より、拡大日本の立場から、東洋に現在語られている童話類が、日本に集まって来た。朝鮮・台湾・満州・蒙古・南洋諸島・印度などで、この時点において語られている童話を、各地に派遣された同胞が取上げた。それ等を日本の国民童話と比較し、類似があれば、それを、朝鮮起源・台湾種・<sup>なんようづる</sup>南洋蔓と主張するような研究もあった。それ等は当時の口碑による話である故、筆者は、その一々を、ただ記録して置いたままで、その時点以外に、資料的の根拠のない事を残念に思っていた。

偶然にも、このたび、文丞娟さんにより、嘗て私が筆録しておいた『<sup>のるふんげ</sup>没夫興夫』の話につき再検討出来た。文氏は日本女子大学卒業で、NHKに勤め、韓国向の放送を担当する方である。かの第2次大戦前に朝鮮の庶民大衆から聞き、筆録して置いた話よりも、話の筋、話根の位置などに、やや確実な点がある。

<sup>のるふ</sup>没夫は金持で吝嗇の兄、<sup>興夫</sup>興夫は貧乏で情深い弟である。興夫は兄の厄介になって暮していた。或日、足を痛めた燕を救い、傷を癒してやり、すっかり元気になった故、放した。燕は礼心らしく、一粒のバカジ（<sup>瓢箪</sup>ではなく、丸く大きい「ふくべ」である。重さ15キロに達する実がなり、食用にする。Lagenaria leucantha）の種をくわえて来、置いてとび去った。その種を蒔くと、芽が生え

成長し、多くの巨大な実がなった。煮て食うために切り割ると、中に黄金がはいって、弟は富み栄えた。兄の没夫はこれを羨み、わが手で燕を捕え、その足を傷つけ、治療してなおし、放してやった。数日後に、燕が種をくわえて来た。待ち望んだバカジの種で、蒔くと、成長して実がなった。しかし食べようとして割ると、中には糞が一杯詰まってい、家じゅうが悪臭で堪えられなかった。吝嗇の兄は次第に没落し、弟の方は、善行によって富み栄えた。しかし没落した兄を弟は救ってやった。

文氏の話によると、この話は18世紀頃から語りはじめられたとか。真実に18世紀の年記のある史料が有ったとしたら、私の研究の対象となり、此上もない喜びである。『宇治拾遺集』は説話文学の巨峯、鎌倉時代文学中で輝かしい存在で、大体にその成立は建保<sup>(1218)</sup><sub>(1218)</sub>の頃と言われている。13世紀と18世紀——5世紀の差があり、18世紀が正しかったとしたら、偶然の類似か、又は日本の『腰折れ雀』・『舌きれ舌』が韓国への影響かと思われる。バカジは朝鮮では、米入れなどの各種の入れ物、桶の代用、米びつ等、庶民大衆の生活と、密接な関係があり、食料ともなり器物ともなる物、燕も雀も、日・韓両国民の生活に融けこんだ鳥である。此処でもまた、年記の確実な史料の出現が願われてならない。

## 6. 「雀恩に報ゆる事」の梗概

「舌切雀」が記してある一番古い物は、『宇治拾遺物語』<sup>(巻第)</sup>の「雀恩に報ゆる事」である。

昔昔、子供に石をうちつけられて、腰を折った雀を、60いくつの婆さんが救い、小桶にいれて飼っておいた。米を食べさせたり、又、銅<sup>あかがね</sup>が雀の病気の薬になるといので、銅を削って食べさせたりしたので、雀の傷は次第に癒えてきた。しかしこの婆さんの子供や孫達は、婆さんがこんなに雀を大事に飼っているを見て、それを馬鹿にするのであった。幾月も養っているうちに、腰の折れた処が、すっかりなおった故、婆さんは或日家の外に出て、雀を手の平に載せた。すると雀はパタパタと羽ばたきをし、飛びさってしまった。婆さんは、

「可愛相に、何処かへ飛んで行きました。そのうちに、又、もどって来ませう」

などと独り言を言って笑われた。

20日許りして、或日雀がひどく鳴くので不思議に思い、出てみると、長い間飼っていた例の腰折れ雀が来たのである。「まッお前は忘れずに、よく来てくれました」と言うと、雀は口にくわえて来た何か小さな物を、其処へ置いて飛び去った。不思議に思い拾ってみた。一粒の瓢箪の種であった。これには何か理由が有ろうと

考えたので、子供たちには笑われたが、その種を蒔いてみた。

芽が出て良く繁り、普通の瓢箪とは違い、沢山実がついた。近所隣の人々にも分けてやり、食べさせた。婆さんのする事を笑った子や孫にも、瓢箪をどっさり食べさせた。沢山実った中で、大きな物を7・8個、匏<sup>ひきご</sup>にしようとし、家の中へ取込み、ぶらさげて置いた。幾月もたち、その大瓢箪を取りおろし、口を開こうとした。少し重く感じるの、変だと思いつつ、口を切り開くと、中には白米がいっぱい詰まっていた。ほかの瓢箪も同様で、米を他の器にうつして遣ってみると、その分量はひどく多い。婆さんは富裕な身になり、近所の人たちに羨まれた。

隣に同じくらいの年齢の婆さんが住んだ。この婆さんの子供たちは、

「雀を助け、仕合せの身になった隣の婆さんにくらべると、うちのお袋さんには働がない」

と言う。何とかして隣の婆さんのようになりたいと思った。隣へ行き、「雀を助けて仕合せになった事を話して下され」とせがんだ。尋ねられるままに、有った事々を語ると、「ではその瓢箪の種を1粒下され」と願った。ただ1粒しか雀に貰いませので」の返事で、仕方なしに婆さんは家に帰った。どうかして、腰の折れた雀を捜し出そうとしたが、中々見当らない。

そこで石を雀に投げつけ、腰を折って捕えた。1羽の腰折雀を飼ってさえ、あれ程の仕合せになるのだから、2羽・3羽となると、仕合せも、ずっと多くなると考えた。多くの仕合せを得て、子供達にほめられようと思ひ、他に2羽の雀をも、同様に腰を折り、都合3羽を桶に入れて飼ひ、餌や銅を削った薬まで食わせた。傷がなおったので、外へ放してやった。雀の方では、大変に辛い目にあい、いまいましく思っていた。

10日程たつと、3羽の雀が来て、瓢箪の種を1粒ずつ置き、飛び去った。婆さんは大喜びで、それを蒔いた。芽を生し、成長は早い、瓢箪は多く実らず、僅に7・8個であった。婆さんはわが子に、

「そなた達は、わたしに働がないと言いやったが、お前達が羨むあの仕合せの婆さんよりも、ずっと仕合せになりますぞよ」

と大変な機嫌である。子供達は、

「あの婆さんは、近所の人達にも、瓢箪を食べさせたが、お袋さんは、種を3粒も雀から貰ったのだから、瓢箪を人に食わせ、また自分も食べなされるものじゃ」と言った。婆さんは「なる程」と思ひ、さっそく、近所の人にも、家へ呼んで食わせ、我も子供と一緒に食ってみた。その味の苦い事は、たとえ様がなく、食った者は、

「こりゃ、とんでも無い物を食わされた」

「ああ恐ろしい。瓢箪を煮る湯気が、チラッと口のあたりへかかったただけだが、その苦さに、わしは死にそうである」

などと、腹立ちまぎれに、文句を言いに来たが、婆さんはじめ子供まで、瓢箪に当てられて、人事不省のごとくで、吐き散らして、寝こんでいた。人々は、文句を言う相手がなく、渋々顔で帰って行った。

2・3日たつと、瓢箪にあてられた皆の者の気分がさっぱりした。そこで婆さんは考えた。

(これらは、みな白米になるべきであったが、急いで食ったために、こんな怪しい事になったであろう)

そこで残った瓢箪の、全部を家の中に、つるして置いた。幾月かが過ぎたので、「もう良からう。米になりましたらう」などと言い、米を入れる桶を、あれこれと準備し、独りニコニコしながら、瓢箪の口をあけ、桶の中でさかさにした。すると、虻・蜂・蜈蚣・蠅・蛇などが、ゾロゾロと出て来て、婆さんの目鼻といはず、チクリチクリと刺すが、婆さんはそれを、米がこぼれかかるものと考へ、痛さもさほどに感じなくて、瓢箪から振り出していた。

「モンモン雀や、少し待ってお呉れ。段々と出しますほどに……」

などと言っているうちに、7・8つある瓢箪から、沢山の虫が出て来て、子供を刺して傷をつけた上に、更に婆さんを刺し殺してしまった。

雀は腰を折られて無念に思い、多くの虫と相談し、この瓢箪の中へ、はいらせていたのである。

だから、物羨みをしてはならない。(原文を、筆者が平易に書きあらためた)

## 7. 説話の成長。研究資料の蒐集



絵馬。安政二乙卯仲春 一勇斎国芳画。  
山田比呂子撮影。

雀の報恩説話・復讐説話であって、婆さん2人は隣合って住んでいた。一方の婆さんは、幼い者に石をうち付けられ、腰を折られた雀を救い、慈悲を施し、他方の婆さんは、故意に雀の腰を折り、其の傷を治療し、恩恵を売りつけた。この2人の行為は、前者は内容も形式も整った道徳的・標準的の行為であるが、後者は単に形だけを前者に似せたのみで、実際は、力の弱い者への虐待行為、利欲を目的として他を犠牲にする利己的の行動である。善良の婆さんが、雀を飼い、傷を癒し、雀が与えた種を蒔くことを、子や孫たちは嘲笑した。しかし時間が経過するにつれ、これらの人々は、婆さんから瓢箪を貰って煮て食った。結局、雀も婆さんも、危害を加えた者、嘲笑者たちを患む事になって行く。

後者が欲心を起し、雀を傷つける事になった原因は、実は彼女の子供が人の身の上を羨み、親をして雀を傷つけさせたもの、婆の悪行は、子供らに誉められようとする心からである。さればこの話では、悪婆の行為も、子を愛する母親の愛に基礎を置くが如くで、慳貧・強欲そのものからの悪は認められない。宇治拾遺物語は、大体に建保頃に成立したもので、これから今日の「舌切雀」が芽生えたい。

鎌倉時代、將軍実朝の治世の建保年間から、室町時代を経て、「舌切雀」の説話は成長して来た。しかしその間に於ける説話の記録は、今日に至るまで、捜し続けるが見当たらない。時代と共に変化しているらしいが、それは専ら口碑上で行われてい、発展の流れの一点の記録も残されていない。その変化の大きな点は、

- (1) 「腰折れ」が「舌切れ」となる。
- (2) 子供や大人たちの、嘲笑的部分が脱落する。
- (3) 雀は複数であったが、1羽となる。
- (4) 瓢箪を如意宝珠のごとくに考える方法を、より具体化する。

の如くである。時の流れは、話根を変化させ、新しい説話形態を導く。『宇治拾遺物語』の大人向の話は、単純化・具体化などの方法で、より多く時代の子供の心理に適合するように語られ、時代が童話化を深めた。かかる変化は、童話一般及び、日本国民童話展開の特性から考え、1人の口や手によって行われたものではない。国民性を基礎とし、話し手としての多数の親たちの教育的の配慮、聴き手としての幼い者たちの興味——それ等が呼応・交錯し、ほとんど無意識的に、時の長い推移中に於て行われた。

近世初期に書かれた『舌切り雀』の史料をあさり続けたが、大した資料は発見出来なかった。そこで、時代を元禄に下げて捜した処、赤本中に多少の資料があった。

こうした願いを長く続けた故、5大国民童話に関する資料は、かなり多く集まった。特に『舌切り雀』に関する



る資料の、江戸後期から、明治にかけての文献は相当以上に多く、珍しい物も多少はある。

## 8. 元禄刊本『したきれ雀』

元禄(1688~1703)頃の出版と思われる「舌切雀」の文献を発見した。これは赤本の初期の物で『したきれ雀』(丹表紙、5丁1冊「元禄板本」とよぶ)と題簽にある。

貧しい婆さんと、慳貪邪見の婆さんが、隣合って住んでいた。貧しい婆さんは、子供たちが、捕えて殺そうとする子雀を、銭を出してやっと買い、我子のようにして大事に育てていた。すると或日の事、隣の慳貪婆さんが作って置いた糊を雀がなめたので、隣の婆さんは雀をひどく殴打し、舌を切った上で、逃がしてしまった。貧しい婆さんは非常に悲しみ、雀を捜しに出る。松原で尋ねる雀に出会い、雀のかくれ里に連れて行かれた。雀の親は一族を引連れて出迎え、かくれ里へ招待し、山海の珍味で饗応した。婆さんは土産物に小さな葛籠を貰い、帰ってから開いてみると、金銀や立派な布が沢山に入れてあった。婆さんは大福長者になった。隣の慳貪婆は、これを聞いて非常に羨ましく思い、雀のかくれ里を捜しあて、饗応され、土産に大きな葛籠をもらって帰った。ふたを開いて見ると、中から虫や蛇などがたくさん現れ出て、慳貪婆を喰い殺してしまった。

この文献は非常に珍しい物であって、入手した喜びが大きい、永い年月の経過と、保存の不良のために、紙質がもろくて、綿のようになり、ムシレが甚だしく、やっとこれだけ読み得たもの、筆者が補綴した処がある。その外題は、後人の手によって正徳・享保(1711~1735)頃書かれたものかと思われる。

## 9. 『燕石雑志』の「舌切雀」

『燕石雑志』中には、次のような『舌切雀』の話を、馬琴が記す。

腹の黒い老女が、洗濯した衣につけるため、盥の中に入れておいた糊を、隣家の女房が飼っている雀がなめた。立腹して舌を切って放した。女房は夫と共に雀をたずね、やつの事とその所在をつきとめた。雀は年ごろ情深かった事を喜び、夫婦にごちそうし、雀踊などで終日もてなした。夕方になり夫婦が帰ろうとすると、2個の葛籠を出し、「重い方を御望みか、軽い方がようござるか」とたずねた。「老人故に軽い方が良い」とて、夫婦は軽い方をもらい、家に帰って開くと、金銀・珠玉・巻絹などが沢山入れてあり、そのために家は富み栄えた。

雀の舌を切った老婆は、これを羨み、隣の女房に雀の宿とその道聞き、たずねて行った。雀はまた葛籠2

つを出して「重い方を御望みか、軽い方がようござるか」とたずねた。重い方は宝物も多かろうと、貰って帰り、重さを忍び、やっと家にたどりついた。蓋をひらくと、鬼どもが中から飛び出し、老女を喰い殺した。

博学の馬琴のこと故、『宇治拾遺物語』・『雀の松原』(繪巻物。句)・『搜神記』(中国晋時代の歴史家)・『述異記』・『書言故事』・『夫木集』などを引用した上で、『搜神記』の揚宝の故事によって、宇治重相が「雀恩に報ゆる事」を作ったと断じている。

前記『歌等功雀高名』(黄表紙)の「吉原雀家系」は、『燕石雑志』の出版より14年以前であるが、その起原を漢籍からとする作者「宝倉主」の態度は、馬琴と同じである。宝倉主について調査してみたが、或は「七珍万宝」かと疑われもするが、さだかではない。

七珍万宝(1762/1831)は芝増上寺前の、上菓子店翁屋の主人で、福島屋仁左衛門ともいったとか。森羅万象を師とし『御存夜討蕎麦』(七珍万宝作。歌川豊国画。寛政2年版、黄表紙)の如き江戸草紙を出版した。宝倉主が七珍万宝か否かは別とし、とにかく漢学的教養のあった事は作品からしられる。

『燕石雑志』には、馬琴の学的立場から、『宇治拾遺物語』を引用し、さらに、

「今の子どもは、すこし作りかへたる処あり」

とて前記の如く、文化6年頃語られていた『舌切雀』を記す。これこそ、年代も確かであり確実な資料で、古い形態によるものである。この時、第2系統の説話も同時に行われたであろうが、『宇治拾遺物語』引用の立場から、第1系統の方を、選択して記したと見られる。

## 10. 『舌切雀』説話の2系統

説話は成長して行く。それは話し手と聞き手の心の中から、静かに芽生え、成長するものである。すでに述べた『舌切雀』の話の筋から、その成長のさまはわかるが、手早く、爺婆と飼っている雀を中心として分類すると、三系統となる。

○隣合って住む婆さん2人の事。雀は善良の婆さんの方で飼っている——第一系統の説話。

○婆爺は夫婦で同一の家に住む事。雀は夫である爺が飼っている——第二系統の説話

○単に爺・婆・雀のみに意匠し、伝統の話根を殆ど保存しない新作物——第三系統の説話。

第一系統の説話は、

(1)『宇治拾遺物語』の「雀恩に報ゆる事」。

(2)元禄刊本『したきれ雀』。

(3)「Tangue Cut Sparrow」(ダビッド・タムソン)。(訳。明治18年8月刊)。

のような説話である。この話を聞く幼童の立場からすると、隣家同志の関係よりも、一家庭内の出来ごとの方が把握し易い。この意味から、第二系統の説話は、更に

進歩した形態といえる。

第二系統の説話は、

(1)奥田忠兵衛板『舌切雀』(銅鑄小本、明治22年刊)。

(2)『日本5大噺』(京の薬兵衛著、明治34年5月刊)冒頭の『舌切雀』。

第一系統(3)の「Tangue Cut Sparrow」は、題簽に漢字で『舌切雀』と左から右へ横に文字を並べる。説話名は、明治18年当時の呼び方。外題の書き方こそは、英文のタイトルに一致させた新書法である。言文一致の発達に、童話の表記法が関与している事は見のがせない。但し英訳の内容は、元禄刊本『したきれ雀』によっている。

「腰折れ雀」がはじめの名称である。変化した、「したきれ雀」と「したきり雀」とでは、「したきれ雀」の方が古い名称、それは「舌切られ雀」の意味である。「舌きり雀」では、雀が、われとわが舌を切った如くに感じもしたろうが、成長はそうした事を無視し、現在は『したきり雀』となってしまった。

## 11. 寛延刊本『したきれ雀』

寛延(1748～1750)頃出版した江戸草紙中の赤本に『したきれ雀』(岩崎旧男爵文庫、大東急文庫蔵。)がある。この出版は、赤本研究上から、寛延年間と思われる故、『寛延したきれ雀』と私は呼ぶ。僅に60余年の後だが、元禄の説話より変化している。

中昔のことであるが、ある田舎に「もの弥五太夫」という人が住んだ。心は正直で慈悲心が深かった。ある時、よそから帰る途中、子供が多く集って、雀1羽を捕へ、殺そうとするを見、子供らに銭を与え、雀をもらって家に帰り、娘のお梅にこの雀を与えて飼わせた。妻の慳貪婆は、お學をうみながら、いやな顔をして、「雀などは逃がしてしまいなされ」といった。

或時婆さんが洗濯に使ふ為に糊を煮て、さまして置いた処、雀が籠から出てきて、糊を少しなめた。慳貪婆は大層腹を立て、情なくも雀の舌を切って逃がしてしまった。娘のお梅は「かか様、むごい事なされますな」と、母の残酷な行いを止めようとした。弥五太夫は娘のお梅と下男の新八を連れ、雀の行方を尋ね、

「したきれ雀、チョッ、チョッ、チョッ。したきれ雀チョッ、チョッ、チョッ」

と呼んで尋ねあるいた。雀の親は弥五太夫の親切に感じ、「すげの松原」まで出迎え、弥五太夫を我家へ伴って馳走した。雀は瀬川菊之丞の槍踊りを踊ってみせた。雀に馳走になった弥五太夫は、葛籠を2個貰って帰った。弥五太夫の貰った葛籠は軽く、婆さんへの土産だと言って出された葛籠は重い。軽い葛籠を弥五太夫が背負い、重い方を新八が背負って帰った。弥五太夫は自分が貰った葛籠を開くと、金銀その他の結構な物ばかりで、一生栄華の生活をする事ができた。

慳貪婆さんは賄欲であるから、新八が背負って来た自分への土産——重い葛籠を開くと、色々の化物が中から出て来て、婆さんに食いついた。

寛延刊本(第二系統の説話)をそれ以前の話と比較すると次の諸点が注意される。

- (一) 始は婆さん同志の事であったが、寛延刊本では爺さん婆さんの間の事になった。
- (二) 始は二家庭間の出来事であったが、寛延板では一家庭内の事となる。これでは爺婆は夫婦でありながら、爺は金銀を得て榮えて喜び、婆は化物に食いつかれる。夫婦間の扶助も同情もなく、悪行による当然の責罰のごとくにみなされる。この点こそ『宇治拾遺物語』の二家庭間の事件の継承とみられる。
- (三) 話根の重大な部分、即ち腰折れでなく、糊をなめて舌を切られる点は、元禄迄には確定している。
- (四) 2人物が雀の家を別々に訪問する事が、寛延板では爺・娘連立っての訪問となり、葛籠を婆への土産物とする。
- (五) 『舌きれ雀』は特に女兒に喜ばれたらしく、寛延板にお梅という娘がはいって来た事は、そのため。
- (六) 後になる程、正邪が対立的に取扱われる。
- (七) 重い葛籠と慳貪とが結びついた事は、元禄以後らしい。元禄刊本では葛籠は大・小の差。はじめの虫類は、変って化物となる。寛延刊本では蛇・見越入道・女の姿の化物などが画かれてある。
- (八) はじめの瓢箪は、いわば如意宝珠の意味である。米という生活的一般的のものから、次第に金銀財宝の貴重品となり、ここにも価値の点からは小さな物が大きなものへの成長がみられる。
- (九) 最大に不快な感じのする「蛇」は、『宇治拾遺物語』から寛延板本まで変わらず、「虫」の代表となって残るさまである。
- (一〇) 徳川初期の仮名草子の『かくれ里の物語』(作者不明、暦2年増屋仁、兵衛板2冊)などを取合せて考える時、室町末・徳川初期には『雀のかくれ里物語』などと呼ばれたではなかろうか。『燕石雑誌』は『雀の松ばら』という絵巻物、作者勾当内侍なる人物を伝える。
- (二) 元禄前後には「したきれ雀」と呼ばれ、これが今日知り得る最も古い名称である。ところが享保3年板の浮世草子『猿源氏色芝居』(九二軒鱗長、作。全6冊)の巻1には「舌きり雀」とあり、現代的の称呼の、これがはじめである。この以後「舌きり雀」の名称が多く用いられる。

## 12. 第2系統の説話の責罰緩和

宝暦2年(1752)の序文のある『桃太郎物語』(説)の筋

の中に、「舌切雀」が挿話となっている事には、特に注意される。

山陰祐太夫の一家内での事件として取扱われている。祐太夫が救い、娘の花世に飼わせて置いた雀が、衣服につけるための糊をなめ、怒った花世の乳母は、雀の舌を切って逃がした。

という筋で、慳貧婆が乳母に変る。この説話の形は、寛延刊本『したきれ雀』に近く、この読本の創作された当時に、語られていた形が取入れられたものらしい。

結尾の点から第一・第二系統の説話を注意すると、婆が悪行を後悔し、善人となったとする話は、第二系統に多く、化物に苦しめられて死んだとするは、第一系統の説話に多くみられる。

### 13. 賀茂規清と『舌切雀』

瑞鳥園齋守翁士(賀茂規清)の随筆「ひなのうけぎ雛遁宇計木(文化頃の隨筆。国会図書館蔵本)」中の『舌切雀』も、第二系統の説話である。

昔々或処に、年寄りの夫婦が住んでいた。爺は正直であるが、婆は慳貧邪見であった。

山で鷹に追われ、爺の懐に逃げ込んだ雀の子を、家へ持って来、爺は可愛がって育てた。或時爺の留守に、洗濯物につける糊を、雀がすっかり嘗めたので、婆は雀の舌を切って逃がした。爺は帰って事情を聞いて悲しみ、『舌切雀』お宿は何方じゃ」とたずね歩いた。すると或竹藪の中から、子雀の親が出て来て、爺に御礼をいい、立派な構への家に案内し、酒肴でもてなし、雀踊を踊って爺を喜ばせた。

土産に、重い葛籠と軽い葛籠とを出した。爺には欲がないので、軽い方を貰って帰り、開いてみると、中には沢山の宝物が入っていた。

婆は事情を聞き、重い方の葛籠を爺が貰はなかった事を残念に思い、爺の止めるのも聞かず、やっとの事で雀の宿を尋ねあて、御馳走になり、土産物を要求した。重いのと軽いのと2個の葛籠を雀が出したので、重い方を貰って帰った。中からは化物が出て来て、婆を気絶させた。爺の勧告によって婆は心をあらため、良い処から養子ももらい、嫁をもとって、栄えた。

瑞鳥園齋守翁士は、鳥伝神道を創始した賀茂規清(1789～1861)で、父は佐渡守報清である。規清は齋守翁・三午翁と号し、従五位上、飛騨守である。博学の英才で、その遠祖の加茂建角身命が、八咫鳥から伝えられたとする、独得のアイデアによる神道を唱えた、有名人である。しかし瑞鳥園齋守翁士の名と童話と神道とが結びつかず、学界の調査が及ばず、昭和初年の図書監修官で、国定教科書に国民童話を書いた佐野保太郎氏は全くこれを知らなかった。『日本5大童話の研究』(『国語教育』第18巻第12号)の丸山林平氏は「瑞鳥園齋守」とするに過ぎない。

この不明の人物の著述が、家蔵書中にあり、偶然だが、私の手で全貌を明かにすることが出来た。『日本魂復古酒乳』・『和訓考』・『日本書紀神代根国史』・『和軍蜻蛉備』・『太平千代松』・『陰陽外伝磐戸開』・『日本書紀常世長鳴鳥』・『烏伝神代記』・『天御鏡神歴考』・『古事記蒲黄儀論』・『古事記鱗鈴形』・『旧事記日矛遁伝』などと、多くの著書があり、その或物は家蔵(著者自筆)である。それ等の中で、出版した物は、遠鳥となった彼の立場から少ない。かつて次田潤氏に、賀茂規清の『古事記』・『日本書紀』に関する著書名と、その大体の内容を御知らせしたこともあった。

弘化3年(1846)下谷池之端町に瑞鳥園を建て、鳥伝神道の広布の本拠本社とし、別に各地に支社を設けた。信徒は日に加わり、特に庶民大衆の入信者が多く、今日の創価学会めいた様相を呈した。明治と改元した慶応4年9月8日より21年8ヶ月前に本社建設、僅に2年後の嘉永元年(1848)4月、規清は八丈島に流罪となった。

国家主義的の主張、皇朝尊崇の態度、日毎にその数を増す信徒、賀茂規清の明晰な分析と巧妙な弁舌とを、妖言人を惑わすと幕府は見た。

流罪となった規清は、八丈島で神道の修行と著述に力を注いだ。『雛雀宇計木』は、恐らくは八丈島で稿したもの、それは彼の幼時、京都地方で話された『舌切雀』の筆録と思われる。嘗て佐野監修官は、『燕石雜志』(文化7年北山序)よりも『雛遁宇計木』は、はるか前に書かれたものと主張された。この事は、

文化6年(1809)よりは嘉永元年(1848)がはるかに昔である。

の内容となる。童話を専門の職務とする方がこの通りであった。兎に角、国民童話を、本腰で研究する者がなかったためである。こうした事情のもとで書かれた国民童話が、小学国語読本にのせられ、当時の全国の小学生は、それを学ばせられたのであり、『教師用指導書』は、かかる研究事情で書かれていたのであった。

### 14. 宝暦『舌切すずめ』

家蔵本、刊年不明の黒本で、黒本研究上から宝暦(1751～1763)年間の刊行と思われる『舌切すずめ』がある。

昔々、ある処に爺と婆が住んだ。爺は正直婆は慳貧邪見である。爺は或時、羽根を痛めた1羽の子雀を拾って帰り、可愛がって育てた。爺の留守に、婆が洗濯物につける糊を、雀がなめめたので、舌を切って放した。爺は子雀を尋ねて廻ると、ある竹藪からその子雀が出て来、爺をわが家へ案内し、馳走し、雀踊をして喜ばせた。爺は2種類の葛籠のうち、軽い方を貰って帰った。婆は事情を聞いて尋ねてゆき、重い葛籠を貰って帰った。開くと色々の化物が現れ

婆を苦しめた。「それみた事か」と爺は言い、婆の日頃の貪欲・邪見を意見した。婆は心を改め栄えた。梗概で明かなように、今日の形態にかなり接近しているが、時代は昭和45年より約210年前で、勿論赤本と同様に全頁絵入りである。国民童話としての『舌切雀』の变化成長の度合は、処により人より、遅速さまざまである。

『舌切雀三の切』(市場通笑作。北尾重政画。天明2年刊。黄表紙)は「舌切らず雀」で、正直爺・慳貧婆、悪人の夫・慈悲の妻の二組を取合せ。弥五太夫は正直者、婆は胴欲者で、弥五太夫は、楽々と暮した。隣家の五平は後添いの入夫で、呑みたくれで身代をへらし、先夫の娘のお松と女房は難儀する。隣家五太夫の楽な生活をうらやみ、悪心をおこし、いやがる女房に雀の舌を切らせて放し、継娘のお松と、雀を捜しに行く。雀にあい隠れ里へ案内されると、五平は宝物を欲しがり、大葛籠を貰った。お松と共に雀の家を出たが我家には帰らず、お松ともはぐれる。仲間の処で葛籠を開くと中には大石が入っていた。妻はお松を五平が売ったと案じ、雀の隠れ里を尋ねた。妻は五平には、雀の舌を切ったふりをしたが、情深く舌は切らずに逃したので、雀の親は嫁入り前の娘に傷がつかなかったと喜び、御馳走した上で、葛籠2個を雀に背負わせ、五平の妻を家におくらせた。家で葛籠を開くと、一方には案じた娘、他方には宝物が入っている。五平は辛き目にある。

親や子供らに親しまれている『舌切雀』は、大衆物として色々と脚色され、こうした第三系統の説話となっている。

## 15. 国学者は『舌切雀』を長歌に詠じた

宣長の学風をしたい、古学を研究し、多くの著書を残した黒沢翁満(1795~1859)は忍藩の士、彼は大阪留守居役となり、堂島の藩邸に住み、藩務の余暇に国学の研究と童話研究を行い、『童話長編』(黒沢翁満著。安政4年刊。7童話を長歌にて、その筋をも加えて詠じた。)の著がある。これには、長歌の前に「大むね」として、『舌切雀』から『猿蟹合戦』に至る5大童話を概論する。『舌切雀』のあとには『桃太郎』を長歌に詠ずる。この順位でも、幕末の時点において、『舌切雀』の、女子供に、人気のほどが知れるようだ。

### 詠-舌切雀-長歌并短歌

をとめらが 袖ふる山の みず垣の 久しきときゆ  
語りつぎ 言ひつぎけらく いにしへに 翁お  
むな 有けらし 翁は山に 真柴かり おむなは川に  
古衣ふるころも ときて洗ふと 煮にしりを 雀くひぬれ 梓  
弓 張るべきぬの 術をなみ しこつ雀 此舌や の  
り食ふ舌と はさみもて 切てはなちぬ 足引の 山  
より翁 帰りきて 歎きいきつき 赤良ひく あした  
は餌かひ ぬばだまの 夕さりくれば とぐらたて

めぐしうつくし わたつみの かざしの玉と 手にす  
えて 在こし物を うれたくも はなちけるかも 心  
なく 舌さへ切ぬ 今更にかへりこめやと 足づり  
し さけびおらび おむなをば 痛くころびて 末終  
に ゆくへまがんと 玉くしげ あくがれ出て 我鳥  
の 宿りやいづく 舌される 雀やいづく ちちのみ  
の ちちよちちよと 音になきて ありかともつつ  
山のそき 野のそき行けば いくみ竹 こもれるかげ  
に たしみ竹 たしにあへして くさぐさの ためつ  
物出し 葛籠つづらこの 重きと軽き 家づとを いづらと  
問へば うつせみの 世の遠人の 重からば 帰さ  
に あへじと 葛籠つづらこの 軽きをおひて 玉ぼこの  
道もやすらに つまごもる 宿に来つきて あけたれ  
ば 玉にこがねに 銀しろがねに 宝のきはみ うまごりの  
あやにしきさへ そくらくに あらくを見てぞ お  
むなも 雀の宿り こまつるぎ 我も問んと ふくつ  
けき 心ふり起し 舌切れる 雀やいづく ちちのみ  
の ちちと呼びつつ とめゆきて かく老いぬれど  
我はもや 重きにあへんと 葛籠この 軽きはとらず  
て あへぐあへぐ 岩根さくみて なづみつつ 家に  
帰りて かき数ふ ふたを取れば はふ虫の わざ  
はひ出でて むかで刺し あむかきつき 谷ぐくは  
まなこにゆまり へみさへに うなじまとひて おむ  
なは つひに死にけり ねじけ人の 物のむくいはい  
ちしばの いちじろしきかも すむやけきかも  
いささかの 糊といへども 庭すずめ  
くはずば舌も 切られざらまし

国学者の古語好みで、「とぐらたて」・「痛くころび」・「いくみ竹」・「たしみ竹」・「うまごりのあやにしき」・「谷ぐく」・「ゆまり」などと、現代人の耳に、熟せない語を使用するが、内容は第二系統の『舌切雀』で、結末は死である。伊勢国桑名あたりにて、語られた『舌切雀』と思われる。出版年は安政4年であること、長歌での表現が珍らしく、資料として尊重すべきである。

## 16. 『竹の栖物語』が最優秀作品

『舌切り雀』に取材した作品、或はそれを脚色した小説中で、最優秀作品は『竹の栖物語』である。作者は井上淑蔭(1804~1886)。原稿は文政10年5月1日頃に、川越城に近い石井の里で完成(原稿本)した。淑蔭は武州入間郡勝呂村に生れ、幼名を多蔵とよばれた。江戸に出て、泊瀬舎清水浜臣に学び、後に、井上文雄(1800~1871)に師事した。古学に通じ、明治2年に大学中助教に任ぜられ、神祇少史となり、後に権大講義に補せられた。この人物が、『竹の栖物語』によって、『舌切り雀』を脚色した。

筆者は学生時代に『かくれざと物語』(青表紙の大本1冊。11丁。著者の原稿本)という原稿本を入手した。別名『須々米物語』とあり榎

亭すなわち井上淑蔭の作である。これには、板下本が添えてあり、梅溪写の挿絵4図もはさまれている。恐らくは井上淑蔭の保存本らしく、更に明治28年11月28日、国文学者の鈴木弘恭校閲、岡野竹園(英太郎)標註『鏝かくれ里、一名舌切雀』(松根堂)がそえてある。当時の金で12円、高価と思ったが、国民童話資料として、これ程に揃った物に出会わず、飛びつくようにして入手し、今日も愛蔵している。筆者の愛書癖は、どうにもならず、こうした事により生活難を加える、思い出の資料である。

昔媼と翁とが片田舎に貧しく住んでいた。翁は情深い人であったが、子供が無いので、雀を籠で飼っていた。媼は性質が悪く、いつも翁が雀を大事に飼うのを憎んでいた。或日翁が山へ行った留守、媼が搗うっておいた糊を雀が少し嘗めた。怒った媼は、舌を切ってしまった。雀は、

からき世は うしほの中に のがれ入りて またき  
うむぎと なるべかりしを

と詠じ、美しい少女の姿に変わった。

「かくて、みめよき少女となりて、衣きぬきよそひ、い  
とようけさうして、今はといでいなんとするに、さ  
すがに数あまた多年なれにし里の、名残惜まれて、暫いと外  
のかたを見いだせば、前裁せんざいのいささむら竹に、吹すさ  
ぶ風の音、くさむらごとにすだく虫の音も、折からあ  
はれもよほされて、うちしほたれたり。家刀自の心  
のさがなさは、さる物ながら、あるじ君の、年月に  
うしろみいつくしみ給へりし御情の程、何時いつの世に  
かは忘れ奉らん。をさなかりし折、なにがしの院に  
て、蒙求をつづしり読み、くさぐさの文をも聞知り  
たれるを、かゝる折に、一言ことをだに残さざらんは、  
いとすさまじう心浅かりなましとて、舌の血して、  
いとねんごろに書いつけて、あるじ君帰り給はば、  
是を奉り給ひねとて、やがて家を出て、雲にたぶよ  
ひ風にひるがへりて、いつちいにけんあとはかなく  
失せにけり」

立ち去る前に、翁に手紙をしたため、

いでていなば 君より外に とふ人も  
あらし吹まく 呉竹のおく

の歌をのこし、あわれにも行方知れずになった。

翁はひどく悲しみ、旅の支度をし、あちこちと尋ねあるき、不思議な里に尋ね入った。そこでは、乙姫の様に美しい少女が上座にいて、翁に盃を賜はり、舞姫の舞踊で興が1入加わった頃、少女は翁のそばへ寄って来て、

「われは、君の家にやしなはれつる雀になん。刀自君の、あさましきみ心におちて、みもとをのがれいで、今かく、ふる里にかへり住みはべり……」

と言い、此処まで翁が尋ねて来てくれた恩を謝した。

そして、自分の家に代々伝はっている2個の皮籠かわごがあるが、その1個は軽く、他の1個は重い。いずれとも、御心にまかせて差上げようと言う。翁は軽い方を望んだので、主人の少女は、

いにしへの おもき恵に むくいてん  
おくる皮籠は よしかるくとも

と詠じた。翁は答へて、

浅からぬ これの皮籠の そこばくに  
こむるなさけや 君がたまもの

と答えた。翁は家にもどり、皮籠を開くと、中には7種の宝、綾錦などが、多く入れてあった。

媼はこれを見ると、すぐに不思議の里に行き、少女に対面し、自ら皮籠を欲しいと申し出たところ、少女は、既に軽い方は翁に差上げてしまったからとて、重い皮籠を贈った。家に帰って開いたら、宝物を翁にも分けてやらねばならぬので、良い品物を、早く自分の物にしようとして、途中で皮籠を開いた。中から大蛇の様に首の長い法師、一つ目小僧、その他の化物が出て来て、媼を苦しめた。媼は、

うるはしき 心をちちの 宝とぞ かねて知りせば  
かからましやは

と詠じて、死んでしまった。翁は末長く富み栄えた。すべて人は直き心を持つべきである。この話は、淑蔭が幼少の折、80余歳の翁から聞いた話である。

以上の梗概の中に記した和歌の外に、

いかならん しらぬ山路を ゆきゆきて 日もくれ  
竹に ねぐらしめけん (翁)

おぼつかな たが住家すみかぞも み山べに 玉をかざり  
て 建てしうてなは (翁)

呉竹の うきふししげき 世の中を よそに雀の  
棲すむ宿ぞこれ (侍女)

みとせまで 家わすれけん 浦島が むかしおぼゆる  
今日にもあるかな (翁)

雲霧を しのぎし道の いたづきも 山のかひある  
宿に来にけり (翁)

われも千代 君も八千世と うたひつつ 酔をすず  
めの 酒ゑらぎせむ (主人の少女)

以上6首の和歌が、文中に挿入されている。文章は擬古文の上乗であり、歌は優婉な清水浜臣の系統をうけ、更に井上文雄の影響も加わり、こまやかな情緒をこめた歌風、文章は典雅流麗である。特に注意すべきは末尾の言葉である。

……おれをさなかりしほど、近きわたりの、やそぢばかりの翁の、折ふしに物がたれりしを聞しなり。春すが過、秋暮くわて、今はととせあまりの昔にやなりにけん、なほ耳のそこに残れるを(板下本。)

上の文では、(-)幼少の時、80ばかりの翁に、この話を



5万巻をもつ小山田与清の擁書楼には、国民童話に関する、貴重史料も多かったであろう。そうした大学者までも、『かくれ里物語』には、これ程の好意をよせている。それは国民童話への共通の感情といえる。

### 17. 原稿本『新曲舌喜里寿々女』

井上淑蔭の稿本と同様に、幸運にも入手した珍資料に『新曲舌喜里寿々女』(纂)という原稿本がある。

天保2辛卯孟春、閑々坊愚伝の創作で、巻頭に序文・目次を掲げ、読本形態で全4冊大尾である。これが出版されたかどうかは調べたが不明、恐らくは、この丹念の原稿のみで終わったものか。

その内容は桃太郎・舌切雀をとり合せた人情本的の読本で、馬琴の『童話 赤本事始』出版後7年、それに刺戟されての創作とみられ、かなりに人情本的内容の物である。

ここに又、その頃隣村に雀野忠三郎といふ者あり。其先祖を尋るに、是はごく大昔の事なりし爺と婆2人にて暮せしが、是も同じく爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行きし跡にて、爺が常々秘蔵せし銅鳥の雀、婆がひめ置きし糊を、チョッキリなめたりしを、婆は洗濯より帰りて、大きに腹をたて、悪逆の鉄をもって、其雀の舌を切りければ、雀はその隙逃出して、あの山越えて、此山越えて、或山里へ行きて、ここにて一生を過せり。此雀の末孫、いかなる果報因縁にやありけん、人間に生を得て、是則ち其先祖は雀なるが故に雀野忠三郎とは名乗りけり。

○此者の先祖はもと雀にて、かの婆が悪逆鉄をもって、舌をチョッキリとやらかされたる。其雀の末葉なれば、苗字を雀野と名乗り、また忠三郎といふいはれは、世の中に稚き子供を遊ばせるとて、母親たちや守りをする者が、

○「とんびトロロ、とんびはトロロの藤十郎、からずはガアガア勘左エ門、雀はチウチウ忠三郎」——と節を付けて歌ふなり。依て雀野忠三郎と名乗るなり。此歌の心をもって、姓名を考へみれば、全く虚談ばかりにてもあるまじ。種のある事とみるべし。

此者の娘を花園といふて、其頃は2.8の色ざかり、殊に容顔美麗、世にすぐれて清らかなりしかば、たまたま市に賑はふ巷などに出る時は、見る人指ざし、袖を引いて是を誉めざるはなかりけり。然るに彼の桃太郎も、用事を兼て此市の賑はひを見物して、あちらこちらと歩きける。その日は天気もよくて、同じく花園も此処に至りし折から、此桃太郎は独息子といい、富家にて、何の一つ不足なき上に、鬼が島より数々の宝物を取来りければ、猶いや増の福者にして、身なりも風流に取かざり、また廿にも満たざる、誠に玉子をむきし

『かくれ里』版下原稿本

(上記の筆蹟を左にします)

の城近きわたりの石井のさと、不盡の高ねにたゞむかふ榿亭の窓のもとのおふづくゑに  
よりゐて井上淑蔭するす。

此筆すさひのうは書こはるゝまゝ

『かくれ里』と名つけて

世の人に よきをすゝめの かくれ里  
かくれぬものゝ むくいをそしる

光房

山田比呂子氏撮影

聞いた。(二)文政10年5月の現在からは十余年の昔になるの2点である。この時に淑蔭は24歳で、「ととせあまりの昔」といえば、10歳ぐらい、今日の童話年齢から考えると、時代が150年も昔の事とて、年齢が少し多いようだが、その通りであろう。一方、原稿本には、

こはおのれ、みどり子なりし程、おちぬしのふとこゝろに伏して、夜半の寝覚、暁の鐘待つ間などに物語り玉ひしか、今耳のそこに残りていとをかしうも、ゆかしうも(原稿本)

とあり、以上を対比する時、淑蔭のフィクションであることが知れる。ただ文政10年には、第二系統の『舌切り雀』が、勿論潤色されてはいるが、こんな形態で、川越の城ちかきわたりの石井の里、不盡の高ねにたゞ向ふ榿亭の窓のもと……

即ち川越あたりに、行われていたことの確認の一資料といえる。

これには井上文雄(歌堂)、白檮舎の主の藤原政之らの序文。九江亭の主の游清の跋、清水光房・本間游清・小山田与清ら、合せて7名の和歌が添えてある。小山田与清は、

これも又 雀の心 くみぞしる

ひさごを種の 言葉ならねど

と詠ずる。国学・故実の大学者、江戸第一の蔵書量で

様なる美しき男振にて、花園も俱に身なりを取飾り、此市の群集の中にて、ふと行ちがひ、女も劣らぬ唐の元宗(ママ)皇帝の後揚貴妃、漢元帝(ママ)の後王昭君、何れも三千第一美人(ママ)なり。是等を欺ける程の器量なりければ、互ひに劣らぬ桃桜、思はず2人はふり返り、ながし目に見て別れゆく。夫より女児はあけくれに、たゞ何となく何国の誰とは知らねども、又も逢ひたや見たやとばかり、思ひに胸をなやませて、空しく月日を送りけり。以上が第1巻冒頭「桃太郎・舌切里寿々女の起り」の五丁半の後半三丁の記事の大体である。

天保2年頃には種彦・馬琴・一九・雪麿・徳升が合巻に、馬琴・楠里亭其楽・岳亭丘山が読本、一九・鯉丈・笠亭仙果が滑稽本、春水・鯉丈・鼻山人が人情本、林屋正蔵・三笑亭可楽・東里山人が噺本に活躍するが、合巻以外は、作品も作家も強弩の末力の、魯縞に入るを得ざる様であった。『新曲舌喜里寿々女』は読本めいた形態で、その内容は人情本風というべき作品である。

桃太郎と隣村の花園の恋愛、名主万八の伴洪九郎は花園に失恋して幽谷に住む。洪九郎は悪党で、子分の如鷺吉らに桃太郎方の宝物を盗ませる。洪九郎は年を経た猿の変化の猿婆を殺して幽谷の住居を奪い、更に花園を盗み出す。獵師駄六兵衛は花園に同情し、洪九郎を鉄砲で射殺し、結局桃太郎方へ花園は嫁入る。という筋。単に雀野忠三郎の娘花園というのみで、『舌切雀』の話根を、喪失してしまった第三系統の作品である。ただし、さきに引用した如く雀野の家系に『舌切雀』の片鱗が見られる。こうした処、『歌等功雀高名』の系統の作品で、類似の作品は他にも多い。

## 18. 結 論

1 今まで触れて来た資料を分類すると次の如くである。

第一系統の説話の記録資料。

『雀恩に報ゆる事』(『宇治拾遺物語』)、『元祿したきれ雀』、『燕石雑誌』(馬琴隨筆。彼の幼時に語られた『舌切雀』か)

『The Tongue Cut Sparrow』。

等二系統の説話記録の資料。

銅鑄小本『舌切雀』(明治22年刊)。『日本5大噺』(明治43年刊)。『寛延したきれ雀』(寛延)、『桃太郎物語』(押話中の)。

『雑選字計木』(中の『舌』)、『宝暦舌切すずめ』、『舌切雀三の切』(天明2年刊)、『童話長編』(安政4年刊)。

『竹の栖物語』(井上淑蔭)、『舌切雀』(巖谷小波作。三島博文)、『The Old Story of Sitakiri Suzume』(明治45年刊)、『シタキリスズメ』(小学国語読本巻1。林弘之)、『昭和中初年。文部省』

第三系統の説話による資料

『歌等功雀高名』(寛政8年刊)、『新曲舌喜里寿々女』(関々坊愚伝著。天保2年刊。読本風の人情本)。

多いのは第二系統の資料で、前記以外にも多量にある。『宇治拾遺物語』を源泉とし、流れ出た『舌切雀』の流れの、その源泉に一番近い形が、『元祿したきれ雀』であり、これと源泉との間の資料は半世紀かかって注意したが、不幸にして捜し出せない。二家庭間の出来事、老婆2人で一方は善、他方は悪の組合せから、良い婆を爺にとりかえて一家庭の事に変じた話、悪婆・善爺を2家庭間の話とした物、悪婆・善爺の1組に、別に悪夫・良婦・娘の一家庭が、雀との関係において、絡み合う構想など、様々である。

たゞし童話自体では、単純化の法則に従うごとく、悪婆・善爺の1組と雀の関係に縮少して展開する。

『舌切雀』は古来より家庭的の色彩が濃く、女兒・婦人に人気があり、「舌を切られた事」には、女性の同情が大きく語られている。慳貪婆への憎しみは、女性側の方が男性よりも強烈である如く、説話研究からは、結論づけられる。

- 2 第一・第二両系統の話の結尾は、殺されると改心するの二様である。この場合、殺される方が古いことは言うまでもない。時代の変化と幼者・女性の人気は、話根を変じ、平和的・道徳的の改心に成長させたものである。従って第一系統の話には、殺される結末が多く、第二系統の物には、改心が多い。後年には入りまじる。
  - 3 銅鑄小本『舌切雀』(明治22年刊)の出版は、言文一致運動との関連で注目すべき事。『舌切雀』が言文一致で書かれた国民童話の、或は最初のものか。
  - 4 源泉に近い名称は「舌きれ雀」、下流は「舌きり雀」。想像であるが「雀のかくれ里」などが、室町時代、徳川初期の名称ではなかるうか。「竹の栖物語」の名称は江戸末期。
  - 5 「籠の鳥なる梅川に、こがれて通ふ廓雀、忠兵衛はとぼとぼと……」(『冥途の飛脚』近松作)は近松の名文句で、「廓雀」と言い雀の声の「忠」でうける。遊里の女性は、傷ついて籠に飼はれる子雀の身、『舌切雀』が彼女らに人気があった事も知れる。それでこそ、「籠の鳥なるうかれ女たちに、せめて功德の放鳥会」とも唄われ、「宇佐八幡の託宣にて、諸国に始まる放生会、浮寝の鳥にあらねども……」(『教草吉原雀』(江戸)「俳優の昔を今に教え草、吉原雀の古事を、ここに移して三つ扇、誰も三升とやつし事……」(『筐花手向橋』(清)完)。
- の如くに、情緒をこめて唄われる。『舌切雀』の女性的のムードは、日本に行きわたり、「籠の鳥」の世界をくぐり、庶民生活にもどって、『新曲舌喜里

『寿々女』のよう作となったとも見られる。

清元節では『其川竹廊雀』(延寿太夫連中。中村<sup>かたみのほ</sup>座。文化18年11月)・『筐花<sup>ななむけのそでのか</sup>』(延寿太夫。市村座<sup>座</sup>)・『新吉原雀』(河原崎座<sup>嘉</sup>。永5年9月)のごとく上演されていた。

- 6 雀を捜しに行った場所は松原が古く、ここから雀の隠里へ案内される。隠里のアイデアは、はじめから有ったらしい。後年には、竹藪が雀の隠れ里の様に語られる。吉原雀・雀踊などは、明和(1764~1771)頃に加わったもの。その以前から「竹に雀」の紋は、最も通俗的の模様として広く利用され、『舌切雀』と呼応して、庶民大衆の間に広まって行った。
- 7 婆や爺を迎へに出たのは、舌を切られた雀とする話が古い。小雀の意味が子雀に変わり、童話化につれて、親雀が迎えに出たともなる。親子関係は、童話の話し手聞き手の関係であり、家族的の雰囲気濃くする。
- 8 雀を捜す折の言葉は、「舌きれ雀」——「舌きれ雀チョッチョッチョツ」——などが源泉に近く、「舌切雀のお宿はどこじゃ」——「舌きり雀、お宿は何処だ、何処だ」——「舌きり雀お宿はどこだ、チウチウチウ」などは宝暦(1761~1769)以後の呼び声。
- 9 切断された雀の舌が、如何にして全治したかに就いては、記録は殆どない。但し、家蔵の黒本『舌切すずめ』には、  
「オオおぢいさま、私の舌は藪井竹庵さまのお薬でなをりました」  
とある。
- 10 老人を歓待した際の踊は、はじめは藪の笠ををぶって踊る雀踊であろう。「雀躍」の熟語、「雀百まで踊忘れず」の諺もあり、踊は雀には付きものと庶民大衆が見る為である。後年になると瀬川菊之丞の槍踊などが、世の喝采を博するにつれ、「舌切雀」の話の中に取り入れられる。しかしそれも一時で、雀踊の方は一貫した流れとなっている。雀踊の歌詞は記されていない。後年の物に、  
「君をまつかぜ、こちゃ寒や、チウチウチウ」  
の歌詞が見える。加害者を雀が饗応した事は、爺を歓待する場合のように、具体的に書かれていない。
- 11 末流になる程、正邪善悪が対立的に取扱われ、悪婆は大きい葛籠、又は重い葛籠を強請する。大きい方、重い方が、小さい方軽い方より内容的である事は、子供にはよく理解されるからだ。1粒の瓢箪の種によって得る幸福より、3粒の種による幸福が、分量的に大であるとする『宇治拾遺物語』の価値観の展開である。この葛籠の数も、単に2個だけとし、始に一方の人物が軽い方を受取り、後の人物が、残りの重い方を貰ったとする話と、何時も軽・重の2種

の葛籠が用意され、そのいずれでも選択し得るようになっていている場合とがある。前者は源泉形態に近い物、或はその話根を敲しく伝える話である。葛籠を皮籠とする表現もある。市場通笑の黄表紙『舌切雀三の切』(天明<sup>2</sup>年刊)は、葛籠の中に宝物や化物ならぬ、生きた娘を入れて背負い出す趣向に変じている。

- 12 小さい葛籠、軽い葛籠から出て来る宝物は様々である。金銀や色々と結構な物、宝珠や金銀、金銀珠玉巻絹、7種の宝と綾錦……資料により様々に記されてある。源流に近い話は米、金銀が主であるようだ。末流になると、打出の小槌・隠蓑・隠笠・七宝・宝珠などと、いわゆる童話的の宝物が主となる。
- 13 大きい葛籠、重い葛籠から出る物は、源泉に近い所では虫類。それは「腰折雀」そまゝである。これがやがて化物に変わる。この化物の行動は復讐の変形である。糊を嘗めたという瑣細な事で、身体的の被害をうけた復讐であるが、かの『敵討義女英』(唐船<sup>かたまうちぎじよのはなびさ</sup>漢人作。歌川豊国画。寛政7年刊の黄表紙)の熱狂的歓迎に伴う敵討物の流行により、幕末に向うと、特に敵討の分子を強化して語られた。当方の生命をとられたので、相手の生命を奪う点が、幼童的に『舌切雀』を変化させ、糊を嘗めて舌を切られた故、復讐として、相手の何処かを嘗める行為ともなる。即ち化物が婆の頭を嘗めるとか、頭を衝えたり、尻をなめたり、喰いつくなども、糊を嘗めたことの幼童的の復讐とみられる。特に挿絵では長い舌を出して、  
「なめ殺すぞ」  
と化物がいい、大きな舌で婆をなめる。  
『竹の栖物語』の板下本に画かれてあるのは、巨大な雀の雛の化物が、手に鉞をもち、火焰の如き長い舌を出し、大空から押しつぶさる、婆の舌を切る様、婆は腰をぬかして絶叫の凄絵で、梅溪筆で画かれてある。明治5年の学制制定以後、国民童話への教育的配慮が加えられるようになり、明治29年の刊本『舌切雀』(巖谷小波作<sup>巖谷小波作</sup>。博文館刊)には復讐部分を去り、武江画の婆の姿——重い葛籠を背に山路を下る絵にかわる。その極まる所は、昭和7・8年頃の『小学国語読本、巻1』で、舌を切られた事も、婆の慳貪の事もなく、爺が雀の宿で款待され、土産に葛籠をもらって帰った事に終わっている。教育による国民童話の変化であるが、原形保存の上からは物足りない。
- 14 『宇治拾遺物語』以前の起原に溯ろうとする事は、古来より行なわれた。そうした研究的態度が現れているのは、宝暦2年(1752)序文の『桃太郎物語』中の『捜神記』(中国晋時代の歴史家。千宝の編した小説集)に関係つけた記事である。ついで寛政8年の『歌等功雀高名』、文化6年の『燕石雑誌』である。



楊宝が9歳の時、華陰山へ行き、1羽の黄雀を見つけた。黄雀は鷓鴣<sup>よくろ</sup>巢に襲われて傷つき、地上に落ち、蟻にたかられて苦しんでいた。楊宝は憐んで助けて帰り、箱に入れ、黄花を採って百日ばかり、飼養した。黄雀の羽根も見事に生えた。或夜、12時頃、楊宝が書を読んでいると、黄色の衣を身につけた童子が現れ、楊宝にお辞儀をし、

「私は王母の使でございます。貴君に助けられて、誠に有難く存じます。今から南海に使に行くところですが、帰って来ることは中々むつかしいので、この白い環<sup>たまき</sup>を、4枚進呈いたします。貴君の御子孫は、身が潔白で、三公の位にのぼられましよう」と言い、去って行った。童子の言った通りであった。

この『搜神記』以外では、韓国の没<sup>のる</sup>夫<sup>ふ</sup>興<sup>きん</sup>夫<sup>ぶ</sup>の話や、蒙古童話の類似などが注意される。第二次大戦前から、朝鮮・台湾・満洲・南洋諸島・印度などの東洋諸国に、その時点で語られている諸説話・童話類を、それぞれの土地から持ち帰り、学界では日本の諸説話と比較することが行われた。特に海軍将校は占領地域の民話との関係で、この点に興味を持たれた。海軍省の桑原秀雄大佐の要請で、筆者は水交社で、将校連に日本国民童話の講演をした。南洋の海の中へ生えこむ林・樹上の猿、樹下海中の大蟹などと、現地の事情による童話上の質問が、ひどく活発で、海軍将校の童話への関心には驚かされた。特に海中

へ向って茂る南洋の林、樹上の猿と樹下の海の蟹を見、類似の猿蟹闘争により、日本の『猿蟹合戦』の源泉が、南洋とされる某少将も居られた。この頃は、こうした類似をたどり、或は朝鮮形、台湾種、南洋種などと、日本童話をば現特点の類似のみで論ずる人もあったが、資料、年記を基礎としない点で、単なる思いつきと、私はみていた。その後そうした行き方は少しく衰えたかに見える。

- 15 国文学研究の一方面として、私は童話方面の資料を調べ、原本をも出来るだけ蒐集し、一步一步その源泉に近づくとして来た。特に『宇治拾遺物語』と『元<sup>元</sup>本<sup>本</sup>したきれ雀』の間、天文・天正・慶長・元和あたりの年代の記入のある資料は、いくら捜しても、全く見当らない。ただし桃太郎説話については、慶長5庚子年8月 慈雲院命鑑<sup>あき</sup>政<sup>まさ</sup>誉<sup>のり</sup>筆の『太郎話』

を発見した。この事はすでに学界に発表しておいた。あわせて御覧を願いたい。

お願い 日本童話の珍資料御所蔵の方は、御垂教を願いたいものです。興(狂)歌一首。  
資料(思慮)のない この身くやしや  
着たきりで チュウチュ捜しに  
過す幾とせ 鶴彦  
(完)